

夏の風物 (No.2)

8月の盛夏の季節が訪れた。今年も、大熱波と猛暑に近い日々が続いている。熱中症により命を落とす人も多い。新伝染病が、日本ばかりでなく、世界的に再拡大の状況が続き、非常事態事態宣言で、行動自粛が迫られ、巣ごもり状態の中で、病状が悪化する人も増え、医療崩壊の危機もあり、航空・鉄道・観光業の経営困難、飲食業・店舗の操業短縮による収入悪化、パート労働者の生活困難など、克服すべき課題も多い状況である。また、豪雨や土砂災害などの自然災害・人災も多発している中で、復興・復旧・超克の動きも緩慢である。他方、広島・長崎への原爆投下と、多数の戦没犠牲者を出しながらの敗戦記念日も訪れようとしている。世界に目を転じると、内戦、地域紛争なども収まらないで、このままいくと、世界平和と持続可能な開発目標 (SDGs) の同時解決も困難との見方もあるようだ。ともすれば、悲観的にならざるを得ない状況下で、オリンピック・パラリンピックが、たけなわで、世界から集まった選手らの活躍が日夜報じられ、感動と勇気の源となっているようだ。人も変わり、時代も変わっても、忘れずに後世の子孫に伝え、継承すべき話もある。けれど、人間、神様・仏様でもなく、かならずしも聖人・君子でもないから、少しは癒しや夢や希望および光に連なる話も欲しいということかもしれない。いろいろ批判も多いが、無事成功裡に終わって欲しいものである。

さて、少し、目を転じて、昔から夏の風物と言われるものを、再度観察し、感じたことを述べてみたい。夏の暑さを忘れ、涼風を楽しむものとして、風鈴がある。風鈴は、幼い頃は、南部鉄でできていたと思われるが、風に応じて、風流な音を楽しませてくれたことが、思い出される。最近では、ガラスの球体と折鶴型の風重しもあるようである。多数個並べて、音と映像のコラボレーションを楽しむようになったようである。そういえば、蟬の鳴き声も夏の風物である。しかし、通常、蟬の声も、最初は、アブラゼミ、次いでニイニイゼミ、夏の終わりはツクツクボウシというように、移り変わりがある。北九州では、ヒグラシやクマゼミの声もあったようだ。気候の変化で、蟬の生息域も北側にシフトしているという。もう一つの夏の風物はトンボである。オニヤンマ、ギンヤンマは、ほとんどいないが、散歩の途中、小川の川べりで、シオカラトンボを2匹ほど見かけた。メスの方は、ミソトンボと言ったように思うが、あまり見かけない。夏を彩る蛍の光などは、先ず見かけないが、他の場所でのホテルの一筋の光や乱舞の映像が、Facebook等で流れているようである。百日紅といわれるサルスベリの木の花の薄紅色の花が、勢いよく咲きだしているのも見かけた。また、さんさんと注ぐ太陽の光の中で、ヒマワリの大輪の花が咲いているのも見かけるようである。公園の木陰で森林浴を楽しんでいるとき、最近ほとんど見かけなくなったモンキチョウの跳ぶ姿を見ることができた。夏の風物も、盛んのように見える。

令和3年8月6日

自由俳句：

蝉しぐれ空に卷雲夏木陰